

コメント (1)

垂水千恵

橋本恭子氏の名著『華麗島文学志』とその時代』は、様々な示唆に富む力作である。今回コメントーターを担当する3名一星名宏修氏、豊田周子氏および筆者一は、主として戦前の台湾における日本語文学を専門領域としており、発想や関心も自ずと重なる部分があるやもしれない。そうした重複を避けるため、担当章を決め、コメントを担当することとした。以下、筆者の担当する序章～2章の要点を簡単にまとめつつ、コメントを述べていく。

まず、序章「沈黙と誤解から理解へ」では、本著執筆の動機が語られている。筆者にとって興味深く感じられたのは、1948年の日本比較文学会の立ち上げが、「偏狭な日本主義への猛省と国際性の尊重という「戦後思想」と分ちがたく結びついていた」(p.10)のものであり、「偏狭なナショナリズムやセクショナリズムに陥った戦前の文学研究や文学教育を「比較文学」の理念や方法を導入することによって改革しようとした」(p.11)、高い理想を掲げたものであった、という橋本氏の指摘である。戦後精神の瑞々しさが、学会立ち上げという細部にまで行きわたっていた、ということにまずは新鮮な驚きを感じた。

こうした日本比較文学会立ち上げ時の理想を提示した後、橋本氏は島田や小林が比較文学を受容したのは、15年戦争の只中であり、植民地という環境であったことを踏まえつつ、「独善的日本尊重に陥ったのは一部の国文学者だけだったのだろうか。比較文学者は無傷だったのだろうか？」(p.12)との問題提起をなしている。これはいわば比較文学者の戦争責任の問題にも繋がるような重い問いであろう。

では、何故橋本氏はこうした問題提起をなしたのか。その理由はまさに序章のタイトルにもある、「沈黙」にある。この「沈黙」には二つの側面があると言えるだろう。

まず、第一には、島田の戦前の業績である『華麗島文学志』(単行本としての刊行は1995年だが、実質的には戦前の、しかも1930年代後半の執筆)は、「他の著作には見られない幾多の特長と貴重な論点が含まれている」(p.15)貴重な業績であるにもかかわらず、比較文学の領域では沈黙—というより黙殺されてきた、ということ。そして、第二に、何故か島田自身も沈黙してきたということ、である。

前者については、今回のこのシンポジウム企画者でもある、西成彦氏の証言を伺ってみたい点である。西氏はまさに島田が設立した東京大学教養学部大学院比較文学比較文化専修課程で学び、島田の教え子である平川祐弘、芳賀徹(ともに大学院比較文学比較文化専修課程第一期生)両氏に直接教えを受けたはずである。1961年の島田の定年退職後の比較文学比較文化専修課程で、島田の台湾経験、植民地経験、或いは『華麗島文学志』の方法論はどのように教育カリキュラムに生かされていたのか(或いはいなかったのか)、大変興味を持たれる。また、橋本氏が指

摘する『華麗島文学志』への沈黙／黙殺についても、比較文学という教育／学術システムの「内部」にいた者として、どのような捉え方をしているのか、是非ご教示いただきたい。

上記の執筆動機に加え、もう1点興味深く感じられたのは、台湾の若手研究者（その多くは橋本氏の修士時代の同級生でもあるのだが）から、島田の著作は「植民地主義的であるとの批判」(p.13)が相次いだこと。しかも、その多くが「一種の「うっぶんばらし」に終わらざるを得ない」様な、「島田の思想全体を「理解」したうえで批判ではない」(p.25)ものであったことに対する、橋本氏の「義憤」(垂水)のような感情が、執筆動機の根底にあったことである。

台湾文学、特に植民地時代の台湾文学研究の一つの特徴は、日本人研究者と台湾人研究者が、質、量ともかなり拮抗した形で研究が進んできたことにあると言える。だからこそ、時には直接的な批判やレッテル貼りに晒されることもあり、またそれが不十分なテキストの読みの上に立脚したものである時の、何とも言えない悔しさ、もどかしさは筆者も経験したことがある。

しかし、同時に、前に立ち塞がるもの全てを切り払いながら開拓していった、台湾文学研究の歴史、軌跡を考えた場合、橋本氏の言及の仕方には若干の危惧も覚える。橋本氏の著作を通じて、台湾では誤読に基づいた感情論でしかものを言えない学者が幅をきかしているのか、といった印象を日本人読者が持ったとしたら、それは橋本氏の本意ではあるまい。

著作中で名前の挙がった游勝冠、陳建忠、柳書琴といった台湾人若手研究者たちが、直感的に島田の避けたものを捉え、自分たちの台湾文学観を樹立する上で、どうしても批判せざるを得なかった、という側面もあるということを、この場を借りて指摘しておきたいし、またそれに対する橋本氏ご自身の補足説明もお願いしたい。

が、それにしても、比較文学という研究分野であり、かつ教育制度となったものを「文学研究」の対象として論じることの難しさを、改めて考えさせられた論考であった。

次に第一章「『華麗島文学志』読解の手がかりとして—「比較文学」とは何か」に移ろう。この章は、フランスで刊行された『比較文学雑誌』を丁寧に再読することで、島田が何を受容し、何を無視したか、受容できなかったかということ丁寧に検証していったものであり、まさに橋本氏にしかできない活目すべき論考である。

しかし、ある意味皮肉でもあるのは、橋本氏の追究によって、島田の限界も明らかになったということであろう。フランスの比較文学者たちが目指した新たなユマニズム、つまり、民族間の対外的憎悪や極端な愛国主義を追い払うために私的に協力していこう、というフランス比較文学の最良の部分、島田は結局受容できなかった。それは橋本氏ならずとも、「それはなぜなのか。理想と日本帝国の国家主義とのほざまで、何か島田の探究の足跡が刻印されているはずだ」(p.85)、と問いたくなる点である。

が、結局、橋本氏はそれに対する有効な回答を提示できていない懸念がある。これは筆者の担当範囲を越えるが、第四章「『外地文学論』の形成過程」では、リアリズムというものを課題としては一応認識していた島田像が描かれるものの、第六章「太平洋戦争前夜の島田謹一—ナショナリズムと郷愁」に至ると、文学の国際主義という理念を日本とヨーロッパの間にしか適

応させないで、中国、台湾に対しては、かたくななまでの偏狭的一国主義を貫いた島田像に収斂してしまう。

これではまさに、橋本氏が序章で批判した台湾人研究者たちの島田批判に重なってしまうのではないだろうか。

もちろん、こうした自家撞着を避けるために、橋本氏は様々な試みを行っている。例えば六章では在日日本人たちが持っていた郷愁、感傷への島田の共感を評価した上で、郷愁文学を生む「植民地社会の畸形的環境」に言及、「在台日本人を不幸にする『環境』とは、それ以上に台湾人を不幸にする『環境』であり、その点を認識するならば、両者 (= 台湾人研究者と島田) は出会えたかもしれない」(p.463) と論じている。さらに終章では、「アジア諸国との間に相互的な「憎悪」を解消し、信頼関係を育成するための精神的枠組みを構築する」(p.501) ための比較文学という「美しい学問」(橋本) の可能性、さらにはその困難を「自らの実存を賭けて」引き受けるしかないのが「比較文学者」なのだ、という決意が語られている。

それは感動的とも言える結句であるが、一方では、「それはなぜなのか。理想と日本帝国の国家主義とのほざまで、何か島田の探究の足跡が刻印されているはずだ」(p.85) という一章での問いかけを追い続けた読者としては、肩すかしを食ったような気にもなる。「両者は出会えたかもしれない」というのは、橋本氏の島田および比較文学への美しき夢に過ぎないのではないか。

こうした辛辣な考えが浮かぶのも、第二章「『華麗島文学志』の誕生」に興味深い指摘があるからである。橋本氏に拠れば、島田は「植民地文学」と「外地文学」を差別化していく中で、「植民地文学」= 被植民地の文学 = 「台湾文学」であり、「これは被統治民をアヂらうとする」「左翼崩れの文学」あるいは「プロレタリア・リアリズムといふやうな仮面」をかぶって「外地統治の方針を破壊するもの」(p.154) だと「ジャン・マルケエの佛印小説」(『文芸台湾』第3巻第1号、1941年10月) で明言している。これは島田の思想的傾向をはっきりと示すものであろう。

戦前のプロレタリア文学、あるいは日本人プロレタリア文学者に限界があったとしても、あの当時、もし台湾人作家と日本人が出会い、連帯する可能性が些かなりとも残されていたとすれば、それはプロレタリア文学運動を通じてしかなかったのではないか。前述の島田の言説から判断する限りにおいて、「在台日本人を不幸にする『環境』とは、それ以上に台湾人を不幸にする『環境』である」という「認識」を島田が持つことはあり得なかったのではないかと筆者は考える。言葉尻を捉えるようで恐縮だが、「出会えたかもしれない」と言うのであれば、具体的にどういう条件のもとにおいて島田が「認識」する可能性があったのか、明確にすべきである。さらに、こうした島田の思想的保守性が、戦後の比較文学者にまで影響したのか否かも、検証する必要があるであろう。

さて紙数も尽きてきたが、最後に、今回コメンテーターを担当するに際し、『華麗島文学志—日本詩人の台湾経験』(明治書院、1995年) としてまとめられた島田の著作を読み返してみ、以前には気づかなかった面白さを再発見し、刺激を受けた点について述べておきたいと思う。

まず、何より島田の引用を通して読む在日日本人作家たちの作品そのものが、大変興味深かった。こうした、島田が論じた在台日本人作家たちの文学を、台湾人作家には描けなかった別の台湾表象の記録、として積極的に評価していいのではないか。作品に作家の出自に基づく優劣

をつけたり、文学をナショナリズムに帰属させたりすることなく、植民者による台湾表象を台湾人作家が描いた台湾表象を補完するものとして再読していくことを、台湾側に向けても積極的に提案していいのではないかと考える。それが橋本氏の本来の目的でもあったのではないかと思うが、現状では橋本氏自身が最後まで台湾人研究者の思想的審判に囚われてしまった感がある。島田を遠景とし、島田の論じた在台日本人作家に焦点を合わせて論じていくことが、結果的には島田評価にも繋がるのではないか。また、現在の台湾における台湾文学研究界は、そうした「植民者の記録」を受け入れるだけの度量をもった、成熟した研究空間であると、というのが筆者の印象である。

さらに、「日本詩人の台湾経験」という副題にもある詩の問題は、より発展させていくことが可能であろう。例えば、西川満や伊良子清白の詩における漢語や台湾語の扱い方などは、台湾人詩人にも影響を与えなかったのだろうか。たとえ、直接の影響関係がなかったとしても、何らかの共通の問題意識を抽出することは可能なのではないか。また逆に、日本詩人における漢詩の影響を探ることで、東アジアの文体創造の多様なルートを解明していくことができるのではないか、と思う。

一方、何故島田はフランス比較文学の最良の部分を感じできなかったのか。さらに、そうした島田の思想的保守性が、戦後の比較文学者にまで影響し、悪しき循環を繰り返していないのか、という問いも、継続して議論していく必要がある。何故なら、島田の創設した日本比較文学という研究および教育制度は若干の形を変えながらも今も存続し、少なからぬ影響力を行使しているからである。

以上、橋本氏の著作を通じて島田に出会い、また島田の著作を通じて、上記のような問題に出会ったことに感謝して、コメントを終えたいと思う。